

問題 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

人は顔に年輪を刻む。四十を過ぎたら顔に責任を持って、などとも言う。顔の話は止めましょう、と抗議する人もある。

人の顔は皆違う。どうして違うのか。勿論同じだったら誰も見分けがつかないから違うのである。屁理屈だと思ふ人は次を読んで下さい。

もし人の顔がそれぞれ見分けがつかない位によく似ていたらどうなるか。勿論見分けがつく部分を選んでそこに注目するようになる。例えば臍の形が千差万別であることはかなり確かだから、人類は顔のかわりに臍を出して歩くようになったらと思う人はもう少し先を見て下さい。

シャラーという生物学者が書いた本の中に、一貫にわたって同じような、しかしよく見ると少し違っているような妙な絵が十六個ほど描き込んである。これはゴリラの鼻なのである。シャラーはゴリラの鼻ではなくて、ゴリラの生活を調べていたのである。とにかく生物学者というのはいろいろなものを調べるものなので、ゴリラの生活をどういふ訳で調べなくてはならなかったのかはさておき、ゴリラの生活を詳しく調べるには一匹一匹のゴリラの区別がつかなくては仕様がな。ところがシャラーはゴリラが鼻の形で迅速かつ確実に区別されることを発見したのである。この発見によりシャラーは今出現したゴリラが誰(誰ゴリラ)であるか、たちどころに言い当てられるようになったのである。つまりその位ゴリラの鼻というものは個性があるということになる。

このように生物というものは、ある形質を一つとりあげて見ても、実に多くの微妙な差異を示すものであって、これを多様性というのである。人の顔かたちの多様性は人が社会生活を営む上で欠く事のできない個人識別を可能にしているのである。指紋には二つとして同じ物は無いので、犯罪捜査に利用されることは誰でも知っている。それに気が付く前には指紋のかわりに頭の骨の形を計測して犯罪者の記録としていたのである。

さて人の顔かたちがこれだけ様々なのは、やはり見分けをつける為なのであろうか。この辺は実はかなり難しい問題なのである。

ではネズミはどうだろうか。ネズミを顔で区別するのは難しい。職業柄ネズミは沢山飼うが、顔どころかどれが誰だか判ったものではない。ネズミに訊いてみたらどうであろう。どうやらネズミはお互い同士顔で区別はしていないようなのである。専門家に尋ねるとネズミ同士は匂いで区別し合っているのだから、と教えてくれる。成程ネズミには人の顔ほどさまざまに違った体臭があるらしい。

ネズミは鼻が良いから匂いでお互いに区別ができる。しかしネズミの仲間は鼻が効くばかりではない。匂いを出す腺を持っている種類も多い。つまり体臭を作り出しているのである。場合によっては唾液も体臭に利用するらしい。

人の顔の場合をもう一度考えてみよう。人は眼が大変良い。厳密に言えば、眼とそこからの情報を処理する中枢が良いのである。その代り動物の中では相当な鼻バカに属する。だから眼で見えお互いを区別するのである。

では人の顔に個人差が多いのは、眼が良いからいろいろ細かい区別がついてしまう為であろうか。これも正しい見方の一つだと思う。それが証拠に外人の顔は慣れないうちは同じに見える。顔色や鼻の高さばかり目立って細かい所が目につかないからである。

見る方の問題はここまでとする。でもゴリラや人と、ネズミとでは顔の個人差の幅に違いがあるのだろうか。つまりネズミにくらべて人の方が人による顔かたちの違いが大きいだろうか。これも短く言うと、そうだと思うのである。犬の顔は狎からブルまで実に様々であるが、あれは人間が作ったものだから、ここでは少しおく。

人の顔はネズミにくらべて顔かたちの差は大きくなっていると思う。その理由は、顔の使い途にある。ネズミは御存知のように鼻をよく使う。鼻には沢山の立派なヒゲが生えている。このヒゲは実は感覚器になっていて、これであちこち探索するのである。ネズミは薄暗い時刻に活動する動物で、ヒゲは暗中进行を模索する道具なのである。ちなみにマウスではこのヒゲは三百六十一本プラスまたはマイナス二本ある。この間必要があつて数えたから間違いはない。ヒ

トにはこの種のヒゲはない。哺乳類で無いのはヒトだけである。

どうしてそうなったのか。つまり人が立ち上がったところに問題がある。顔というのは、あるいは頭でも良いが、本来動物の運動方向の先端に位置していて、つまり車で言えば運転手、飛行機で言えばパイロットの居る所だったのである。そこで頭には眼とか、耳とか、鼻とか、さらにはヒゲとかいう情報の収集器官が集合し、それが今度は脳の発達をうながした、というのがつまり解剖学の教える所である。ところがあるところか人は進化の過程で人になる時に立ち上ってしまったのである。すると今まで身体先端だった鼻は必ずしも先端ではなくなり、中年に至ると臍が進行方向の先端に位置しかねまじき大変化が起ったわけである。そうなるネズミのように物事に鼻先を突っこまなくなる。つまり人間の鼻はここに於て解放され、自由になったのである。自由は多様性を導く。すなわちこうでなくては生きるに困る、ということが無くなると多様性が許される。政治ではこれを百家争鳴という。人の顔は直接の探索行動から解放された結果、百家争鳴気味となったのではないかと思われる。そしてそのきざしはゴリラにすでに見られるのである。

(養老孟司『ヒトの見方』筑摩書房、1991による。作成に当たり、省略と改変を施した。)

問1 傍線部について、人間の鼻は何から解放されたのか、説明しなさい。

問2 問題文が「自由」と「多様性」の関係をどのように捉えているかに触れながら、あなたの経験の中で、同様あるいは逆のことが指摘できる事例を550字以上600字以内で書きなさい。事例は身体的なものでもよい。また、なぜ問題文と同様あるいは逆と言えるのかを説明すること。

